

オ

オカミは疲れ果てていました。心も体もボロボロでした。

そんな自分を引きずって、ただ歩き続けることしかこのオオカミには残されていませんでした。もちろん行く当てなどありません。

本当なら、今頃は一番若いボスになって大笑いしていたはずでした。ボスになったら、他の群れのボスもどんどん倒し、世界一のボスになるのが夢でした。でも、ボスとの一騎打ちに負けたのです。

おはなし定期便

## アライグマのぬくもり

きむら ゆういち (文・絵)

「おはなし定期便」は、子どもたちへの「読み聞かせ」や「朝の読書」の時間などにご活用ください。

「へへ、このままこのボスを倒せば、ついにこのオレが……」

そう思った瞬間、ボスが頭突きをしました。

ほんの一瞬の油断で形勢逆転です。

さすが群れのボスです。ちょっとした

隙も見逃しません。

そこからはもうボスの一方的な勝利でした。

オオカミはキズだらけの体を地面にたたきつけられたのです。

もう起き上がるなんて出来ません。

そんな姿を見た仲間たちは、黙って

去っていきました。

あんなに慕っていてくれたのに。もう誰も信じられません。ズキズキする体をやっと起こしてヨロヨロと歩き出しました。夢も破れ、仲間も失い、ひとりぼっち。

「オレにはもう何も残ってない」

そうつぶやいた時、「うぐっ」木の根っこに足を引っかけて坂道をゴロゴロゴロ。

転がりながらオオカミはもうすべてがどうでもよくなっていました。

ドスン。

茂みに隠れていた何者かの体にぶつかってやっと止まりました。

「ひゃっ」

何者かは悲鳴を上げると、茂みからとび出し近くの木陰に隠

れました。

「なんだろう。今の？」

オオカミはぶつかった時のぬくもりに、懐かしさを感じたのです。

よく見ると、それはアライグマでした。

オオカミは、優しかったお母さんを思い出しました。

「待ってくれ」

オオカミは無性にアライグマのそばにいたくなりました。

「助けて」

アライグマはオオカミに追いかけてられて、必死に逃げ出します。

「違うんだ」

そんなことを言っても待ってくれません。

でも少しだけオオカミの方が足が速かったのです。

アライグマは捕まえられる瞬間に、木のウロの中に飛び込みました。

穴の入口は狭くて、オオカミの体は入れません。

「違うんだ。オレはただ……」

オオカミはウロの中に呼びかけました。

「ただ何よ」

中から声が返ってきました。

「ただオレは、おまえのそばにいたいから」

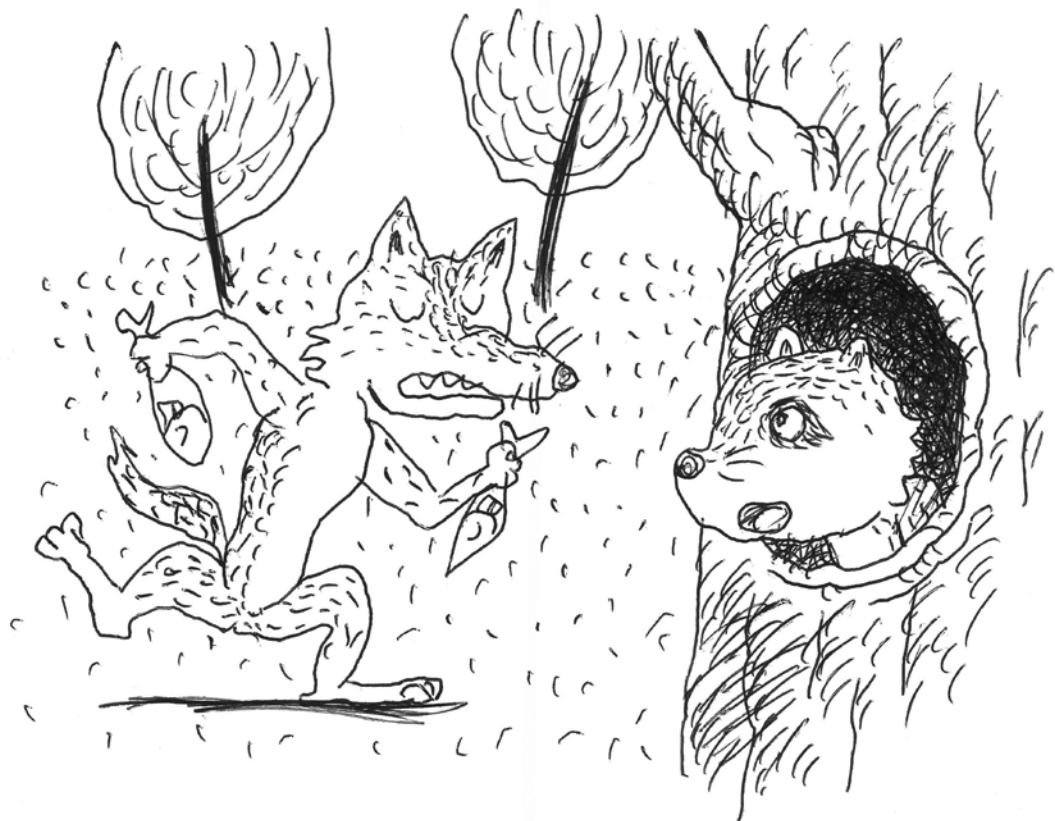
「ふん、わかっているのよ。そう言われて出て行ったら、ガブツてやるのは」

「違う。信じてくれ」

「信じられるわけじゃない。あんたオオカミなのよ」

「オオカミとアライグマが仲良くなったら悪いか」

「今までそうやって何匹の動物をだましてきたの？」



「実はオレ、アライグマに育てられたんだ」

「やめてよ。そんな作り話」

オオカミがいくら言っても、アライグマは出て来てくれそうにありません。

でも、オオカミが外にいる限り、アライグマも他に逃げられないのです。

しばらくして、オオカミの声がしなくなりました。

でも、これはオオカミの罠かもしれないと、アライグマはなかなか穴から出られませんでした。

やがて、アライグマのお腹がグーッとなりました。

アライグマがそうっと穴の外をのぞいてみると、オオカミがヨロヨロとこっちに向かってくるどころでした。

両手に何かぶらさげています。それは、アライグマの大好きな魚でした。

オオカミはそっと二匹の魚を木のウロに入れます。

「ふん、だまされるもんか」

そう言ったもののハラペコにはかきません。アライグマはしかたなく魚を口にしました。

しばらくして、オオカミはグミの実を持ってやってきました。今度はペロリとたいらげたアライグマは

「おいしい！」

と、声を上げました。

次の日は貝でした。

オオカミは信じてもらうために必死だったのです。でもオオカミの体も限界でした。

次の日は、雨が降っていました。なかなかオオカミが来ない

ので、アライグマがそっと外を見ると、オオカミがズブぬれになって草の上に倒れていました。

手にはリングやなしを握っています。

夕暮れ時になって、オオカミがぼんやりと目をあけると、いつの間にか木陰の中にねていました。

「あら、お目覚め？」

すぐ近くでアライグマの声がします。

「お、おまえ……」

おどろいてオオカミが起き上がると

「まだねてなきやダメ！ ホントにバカなオオカミなんだから」

いきなりアライグマがオオカミをどなりつけました。

なんだかお母さんに怒られてるみたいです。みると、オオカミの体にふかふかの落ち葉がたくさんかぶせてありました。

「ひとのエサを心配するよりもっと自分の体を考えなさいね」  
そう言いながら葉っぱのコップでオオカミに水を飲ませてくれます。

「あ、ありがとう」

アライグマのぬくもりを近くで感じると、オオカミの心もふんわりあたたまってきました。

その時からアライグマはいつもオオカミのそばにいます。

今ではオオカミもすっかり元気になって、すつくと立ち上がると、夜空に向かってこう叫びました。

「ようし、今度こそオレがボスになってやる！」

アライグマが優しく笑ってオオカミを見上げていました。



#### きむら ゆういち

1948年東京都生まれ。造形教育の指導、テレビ幼児番組のアイデアブレインなどを経て、絵本・童話作家に。著書は500冊を超え、数々のロングセラーは国内外の子どもたちに読み継がれている。また、『あらしのよるに』で講談社出版文化賞絵本賞など数々の受賞歴をもつ。最新作に『やっとなら』(小学館)など。